

田上 菊夫さん
Tanoue Kikuo

【谷内区】

たのうえ きくお/宮内地区山椒生産組合長。平成28年4月の熊本地震、同6月の豪雨災害をきっかけに同組合を設立。山椒の産地化を目指す。

山椒で被災農地の復興 町全体の活性化へ

「高齢化が進む宮内地区を未来につなぐために」と話すのは宮内地区山椒生産組合長の田上菊夫さん（谷内区）。宮内地区山椒生産組合は、平成28年4月の熊本地震、同

6月の豪雨災害で被害を受けた宮内地区の農地で新たな特産物づくりを進めるために平成31年3月に発足。翌年、地元農家20人でぶどう山椒の栽培を本格的に開始した。令和

5年11月には、同組合と漢方薬大手「株式会社ツムラ」と甲佐町で包括連携協定を締結。今後は生産者の拡大や山椒の加工場の設置も予定しており、地域雇用の創出が期待される。田上さんが組合長に就任したのは同組合が発足した平成31年3月。豪雨災害で多くの

田畑が流され、高齢者が多いこの地域では、田畑を復旧することが難しく、耕作を断念する農家が多数出たという。災害後、地域の復旧に力を注いでいたときに、当時、宮内地区の代表区長であった田上さんに佐藤直樹さん（広瀬区）が山椒栽培を提案。鳥獣被害が少なく、国産品は希少という「ぶどう山椒」に田上さんも賛同し、地域復興の勝算を見いだした。「この地域のために頑張りたいという佐藤さんの熱意もあり、山椒プロジェクトを進めていくことに対して迷いはありませんでした。この地域のために山椒栽培を私が先導していかなければならないと考えました」と組合の発足、組合長に就任したきっかけを話す。

山椒は土地によつては成長速度が遅く、繊細な植物のため栽培は簡単ではなかったと話す田上さん。「栽培のノウハウがなく手探りで始めまし

た。宮内地区の山間地域に似た山椒栽培地の視察なども行いました。生産者の多くは高齢者ですが、みんな協力し、育て方を模索しながら楽しんでいきます」と笑顔を見せる。

宮内地区の山椒は昨年からは収穫できるようになり、栽培から4年目の今年度、約100kgの実が収穫された。山椒栽培が軌道に乗り始めた反面、苗木不足や生産者が増えないなどの課題がでてきた。「ツムラ社に声を掛けていただき、苗木不足も、ツムラ社からの貸与により解決の道筋が立ってきています。町やツムラ社と共同で開催した説明会にも町内から多くの参加者が来てくれました。宮内地区だけでなく町内全域へ山椒栽培のノウハウを伝えていきたいです。近隣の地域とも連携しながら、一大産地となれば嬉しいですね」と話す田上さんは、山椒を通じて甲佐を未来につないでいく。